

北上高地のイヌワシと林業

由井正敏（岩手県立大・総合政策）

岩手県内の北上高地には約 30 つがいのイヌワシが生息しているが、その繁殖成功率は国内他地域と同様に近年急激に悪化し、特にこの 2 年間では 3 ヒナずつしか巣立っていない。イヌワシ個体群は繁殖成功率が 33-40% を割ると減少に向かうと予測されるので、北上高地のイヌワシはまさに危機的状況にあると言える。

国内における繁殖成功率低下の原因は、これまで様々指摘されてきたが、北上高地においては、岩手イヌワシ研究会が長期に亘り収集したデータを解析した結果(由井・関山ら 2005)イヌワシの好適な狩り場面積の減少が強く関与していることが示唆された。

人為影響による繁殖失敗を除いたデータによる重回帰分析(巣を中心とする半径 6.4km の行動圏を仮定)の結果、101 年生以上の落葉広葉樹老令林、10 年生以下の幼令人工林、5 年生以下の伐採放棄林や放牧採草地を含む低木草地の各面積が広いとつがいごとの繁殖成功率は高い。しかし、1980 年代初頭から 2000 年前後にかけて採餌に適した 10 年生以下の幼令人工林は平均 77%、同じく 5 年生以下の伐採跡地低木林や放牧採草地は 43% 減少し、代わりにイヌワシが突っ込めない 11 年生以上のうっぺいした人工林が 56% 増加した。

この間、イヌワシが巣に運ぶ餌動物の内容は殆ど変わっておらず、ノウサギを最も好み、ヤマドリ、ヘビ類が続く。ノウサギが選好する植生は幼令人工林や低木草地である。そうした植生におけるノウサギ密度は既往の調査データから見て長期変化はないが、ノウサギの選好植生そのものは上述のように減少している。

従って、北上高地に生息するイヌワシの繁殖成功率向上のためには、好適な狩り場の維持・造成あるいは再生が必要になる。植生改善のためには、まずブナ林などの落葉広葉樹老令林を再生すること必要であるがこれには長い年月を要する。そのため、幼令造林地や伐採地の創出あるいは放牧採草地の維持再生が望まれる。そうした場合、どの位の面積を確保すれば良いかが問題となる。

イヌワシ個体群を安定的に維持するための繁殖成功率は既存のパラメーターと式(Lande1988)から計算して 33% となったので、これを上記の重回帰式の目的変数に代入して各説明変数を逆算した。その結果、10 年生までの幼令人工林のみでは 750ha、放牧採草地や 5 年生までの伐採放棄地のみでは 1,360ha、101 年生以上の落葉広葉樹老令林のみでは 1,030ha が、半径 6.4km の暫定行動圏(約 12,800ha)内に必要であると推定された。

北上高地における暫定行動圏半径 6.4km 内の人工林面積は平均 5,400ha となっているので、10 年生以下の幼令人工林を必要量確保するには約 70 年に一回伐採し造林すればよいことになる。これは通常の森林施業では十分可能なレベルであるが、現在の林業不況下では難しい。従って、地球温暖化防止対策や国産牛生産拡大と絡めた、広葉樹二次林のバイオマス利用や放牧採草地の再生を含めて、イヌワシの採餌適地の確保が望まれる。さらに、暗く茂ってもやし状態になっている人工林を健全育成するために、列状に間伐すれば翼の広いイヌワシが飛び込む空間が確保できると思われる。北上高地におけるイヌワシの狩り場造りのための列状間伐実験では、ノウサギ密度やヘビ類の目撃頻度の増加、及びイヌワシの突入も確認されたが、まだイヌワシの利用頻度は少なく、改善の余地がある。